

国立医療学会誌「医療」に思うこと

国立病院機構東京医療センター
副院長
大島 久二

4月より本誌編集委員長を拝命した。編集委員会には1年ほど前より委員として出席しており本誌の編集過程に接してきた。しかし、委員長が実際このように多くの仕事をしていたということが実感となったこの頃である。

このコーナー、「余滴」も編集委員が執筆しているが、実に力のこもった文章が並んでいる。新任であるが、「医療」について個人的に思ったことを述べてみたい。

年毎に医学は進歩し、実診療の現場を指す医療においても高い専門性が求められるようになってきた。これは、医師のみならず看護師をはじめとするメディカルならびに事務職を含んだすべての病院職員でも共通の流れとなってきた。そして各分野の専門化の流れとともに、各分野のつながりの低下と患者にとっての細切れの医療が指摘されるようになった。このような流れの中、しばらく前から医療の質を高めるためにチーム医療が必要であるといわれ、近年は効率的な医療のためにも同じ言葉が使われ医療行為の権限分担についての社会的な議論がされるようになってきた。

しかし、全く別の視点でみると、医療という大きな課題について職種を越えて総合的に議論する機会、場所はきわめて限られていると思われる。すなわち、病院で働くすべての職種が参加して討論する継続的な機関があまりないということである。以前臨床検査の現場に携わった時は、医師と臨床検査技師が共通の場で議論し発表していた。リハビリ、放射線、血液透析、薬剤など、それに近い活動はよくみられる。少なくとも、医師と他の職種が参加する学会があり学会誌があるからである。だが、これらも病院

全体の医療職種が参加するものではない。この点、国立医療学会は大変貴重な学会であると思われる。単に学会があるのではなく、学術総会にはきわめて多くの参加者があり活発に議論され、さらにレフリーのいる学会誌「医療」がある。そして、「医療」には実際医療を取り巻くさまざまな課題、問題点につき、多くの職種から異なった視点で論文が投稿されている。1冊の雑誌でこれだけ多視野、多角的な問題のとらえ方をしている学術誌は他に全く見当たらない。ここに、「医療」の独自性と重要性があるのだらう。

編集長として、すべての論文を初期投稿の段階から拝見していると、話題、論点がさまざまであるだけでなく、論文の構成、書き方が実に多様である。もちろん、学術誌としての体裁を整えることは重要であるが、各分野の著明な専門誌における画一的な記述とは異なる、ある種こういうのもいけるかもしれないと思わせる論文もある。編集委員も各分野の方々をお願いしているが、それでも専門から少し離れてしまうこともあると思われる。委員の方々、また査読を特別にお願いした会員の皆様にこの場をお借りしてお礼を申し上げたい。しかし、実際の医療の現場のすべての職種から生の声を聞ける、大変よい機会ともいえる。

本誌はすでに約60年の歴史がある。当初の詳細な経緯は知りえないが、旧国立病院のまとまりから始まったようである。現在は国立病院機構の病院、ならびに新たな独立行政法人となった旧ナショナルセンターを学会員の母体としている。したがって、政策医療といわれる分野の論文も多くみられる。病院の一職員として、医療経済的に採算がとりにくい分野での現場の声など、共通の認識を持つための有用な手段ともなっている。

「医療」を支えている学会員はまだ多くはないのが現状である。編集委員会では、カラーページを導入することも検討したことがあったが、経済的には難しい状況であった。すでに述べたように、「医療」は独自の存在感と有用性のある雑誌であり、新任編集長として、まず継続すること、そして一人でも多くの病院職員に読んでいただけるよう、企画と一つ一つの論文に力を注いでいくようにしていきたいと思っている。